



パロロは出たか？

五十嵐 忠 孝*

バリ島のパダンバイ港からロンボク島レンバール港行きのフェリーに乗り込んだのは去る1月31日であった。ちょうど1年前にも同じフェリーでロンボク海峡を渡った。フェリーの大揺れにパニック状態になった乗客達が我先にと救命具を奪い合っていた光景を思い出す。この季節のロンボク海峡は波が高い。しかし、この大波の季節こそ私が目指すパロロの出現——海面を生殖群泳する無数の個体が押し寄せる——に出会える季節でもある。

パロロ (palolo) はインドネシアではロンボク海峡以東のあちこちで知られる。その醜悪な形状にもかかわらず、たいそう美味とされること、超自然的な伝説のあることは各地に共通する。ロンボク島とスンバ島ではパロロ出現に際して“パロロを出迎える儀式”が行われる。パロロは決まった季節の決まった日の決まった時間帯に出現する。土地の人達にとってパロロがいつ現れるかを前もって知ることは大きな関心事である。

ロンボク島にはササク人の在来暦であるササク暦がある。パロロ (ササク語で nyalé) は毎年決まってササク暦“10月20日”の未明に出現するという。この“10月20日”は西洋暦のほぼ2月に当たる。ササク暦は太陰暦であるため“10月20日”は西洋暦に対して毎年11日ほど繰り上がるが、もし“10月20日”が2月のはじめにずれ込むとパロロは現れないことが過去の記録から知られている。例えば1975年と1994年の予測日はともに2月2日であったが、いずれの場合もパロロは出現しなかった。これに対して、1991年2月5日、1999年2月7日には出現している。今年のパロロ出現の予測日は2月3日である。はたしてパロロは現れるのだろうか？

パロロが出現するかどうかは1日前には確実に知ることができるという。パロロは大量に出現する前日、予兆的に少数現れるからである。土地の人々は予測日の前日未明にこの予兆の有無を調べて翌日の大量出現を確認する。土地の人達は前日の少量出現を nyalé pēnyama と呼ぶが、これは“ちょっと挨拶に来るパロロ”の意味である。これに対して、その翌日大量に出現するパロロを nyalé pēnētēr “舟を積み沈める (ほど大量の) パロロ”という。

2月2日 (予測日の前日)、朝市に行ってみる。というのは、もし明日が“正しい”予測日であるなら、前日の未明に“ちょっと挨拶に来るパロロ”が現れ、これを捕えた漁師達は朝市に売り出すに違いないからである。朝市をぶらぶら歩いてみるがパロロを売る者はいない。どうやら“ちょっと挨拶……”のパロロは出なかったようだ。試しに魚を売る女達へ「パロロはないの？」と声をかけてみる。すると、「ないよ」という答えに混じって「パロロは明朝出るよ」という声、「ひと月経ったら出るよ」という相異なる答えが戻って来た。どうやらパロロ出現の予測日を廻って相対立する2つの見解があるらしい。土地の古老達に尋ねてみるとはたしてその通りであった。つまり、第1は、予兆となる“ちょっと挨拶……”のパロロはまったく出なかったとはいえ明朝必ず出現するはずだとする見解、その第2は、今現在はまだササク暦“9月”であって、パロロが出るのはひと月先であるとする見解の2つである。

2月3日 (予測日当日)、親しくなった土地の古老ひとりをまだ暗いうちに誘い出してパロロが押し寄せるはずの浜へ行く。すでに多くの人達が集まっている。浜に座って待つ者もいれば、潮の引いた海へ膝小僧まで浸かりながら片手に掬い網を持って、懐中電灯の光でパロロがもう来ているのではないかと海中を照らし回っている者もいる。遠浅の海へ目をやると遠方の波打ち際の辺りに多くの人々が集まっ

* Igarashi Tadataka, 京都大学東南アジア研究センター; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

ているらしく懐中電灯の光がいく筋も見える。若者達があちらこちらで何事か大声で叫ぶとどどと笑いが湧く。若者達が発するのは卑猥な言葉で、パロロ——伝説上の王女の化身とされる——を卑猥な言葉で迎えるのだという。……やがて人々のどよめきが出る。パロロが出たらしい。あわてて足元辺りの海面を懐中電灯で照らしてみると無数のミミズ様蠕虫がからだをくねらせながら光をよぎる。その突然の出現は正に“湧いた”というにふさわしい。……こんな風に昨年はパロロと出会ったのだが、今回はどよめきが起らない。そうこう考えているうちに東の空が白みはじめ、やがて周囲の景色が見えるようになる頃、誰からともなく帰りはじめる。とうとうパロロは出なかった。ところが……。

帰路、同行した古老が、どこで誰から聞いたのか、沖へ出た者達は（パロロを）少し捕ったらしいと教えてくれる。パロロは大波の打ち寄せる岩礁がごつごつした岬の突端など、徒歩では近づけないところに大群が集まるもので、浜まで寄せてくるパロロは波に流されて来たいわば“残り物”に過ぎないのだという。土地の漁師たちは浜へ寄せる“残り物”などには目もくれずサンパン（小舟）に乗って大群の押し寄せる沖で待ちかまえる。こういう漁師達が少量ながら漁獲を得たというのだ。つまりパロロは出たのだ。ただその量がわずかであったため浜で待つ我々のところまで打ち寄せてこなかったのである。同行した古老は2月3日をパロロ出現の予測日とする見解であったから少々自慢の様子であった。さっそく朝市へ行って見ると、なるほど、たしかにパロロを売っている。売り出されているパロロの量は前年に較べてはるかに少ない。それだけいい値が付いているのだが、あれよあれよという間に売れ切れてしまった。

ところで、パロロは大量に出た日から1カ月後（正確には1太陰月後）に再び出現する。ササック暦

でいえば“11月20日”の未明に再び現れる。この再出現を *nyalé poto* “終わりのパロロ,” 最初の出現を *nyalé tunggak* “主たるパロロ” といって区別する。つまりパロロは1年に2回現れる。パロロが2回目の出現をする“11月20日”は西洋暦のほぼ3月に相当する。今年の場合、2月3日の1太陰月後、すなわち3月5日（の未明）に2回目の出現が起るはずである。

1太陰月を挟んだ2回のパロロ出現は1年のうちの特定の季節——ロンボク島では2月と3月——に生じる。パロロが1年のうちのどの時期（季節）に現れるのかを決める要因として、南太平洋のパロロ研究者達は、最も重要なのは太陽の天頂通過（*zenith sun*）であるらしいと考えてきた。すなわちパロロの2回の出現は太陽の天頂通過日を挟む前後2回の下弦に起るというのである。ロンボク島（南緯9度弱）の過去のパロロ出現日はたしかに太陽の天頂通過日（2月25-26日）前後の下弦（つまりササック暦の“20日”）である。そして、どうやら、太陽天頂通過日とこの前後2回の下弦との間隔（日数）が隔たるほどパロロの出現量が減る、もしくはまったく出なくなるらしい。ちょうど今年がこのケースであった。ほんのわずかし出なかった1回目のパロロ出現が起きた2月3日は太陽天頂通過日とは3週間ほど隔たっている。これに対して2回目のパロロ出現が生じると予測される3月5日は太陽天頂通過日とは1週間ほどと近接している。法則通りなら大量のパロロが出るはずである。

わずか数日のロンボク島滞在は瞬間に過ぎて、3月5日に予測されるパロロの出現はどうなるだろうかと思ひながら来た時と同じフェリーに乗り込む。……そして3月5日、すでに帰国していた私のもとに、今朝未明にたくさんのパロロが出たという知らせがロンボク島からもスンバワ島からも届いた。